

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24242008

研究課題名(和文) 17世紀オランダ美術の東洋表象研究

研究課題名(英文) "Asia" in Dutch 17th-Century Art

研究代表者

幸福 輝 (KOFUKU, Akira)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・客員研究員

研究者番号：00150045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 19,700,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀オランダ美術の特質はなによりその写實的風景画や風俗画にあり、古代神話や聖書主題の作品を描いたルネサンスと対比されてきた。こうしてオランダ美術における「オランダ的なもの(オランダ性)」の解明が重要な課題のひとつとなった。他方、オランダの経済的繁栄の基盤は東西貿易にあり、芸術作品を含むあらゆるモノがオランダに集まっていた。そのような社会において異国の文化の受容は必然であり、「オランダ性」はオランダ固有の国内問題であると同時に、世界に向きあった国際化の問題でもあった。本研究では、特にアジアの視点から17世紀オランダ美術を再検討し、「オランダ性」に関する様々な調査研究をおこなった。

研究成果の概要(英文)：Dutch 17th-century art with its hallmark, landscape painting and genre painting, make a sharp contrast with the Renaissance art with paintings depicting mythological or biblical subjects. And so the meaning of "Dutchness" has been discussed in Dutch art literature. On the other hand, Dutch economy basically depends on its global trade and many commodities including art works came to the Netherlands. In this kind of society domestic culture is always oscillating around foreign cultures. "Dutchness" is not only a domestic question but an international one. In this research Dutch 17th-century art was reconsidered from the Asian viewpoint, and "Dutchness" was discussed in various ways.

研究分野：15世紀から17世紀のオランダ・フランドル美術

キーワード：17世紀オランダ美術 フェルメール レンブラント 東洋磁器 輸出漆器 オランダ静物画 東インド会社 東西交流

1. 研究開始当初の背景

17世紀オランダ美術を支えたオランダの経済的基盤が世界規模の国際貿易にあったことは広く認識されていたが、「世界的文脈におけるオランダ美術」という視点は従来の美術史研究においては必ずしも市民権を得たものではなかった。静物画に東洋磁器が描かれ、肖像画に「ヤボンセ・ロック」と呼ばれる「日本風室内着」をまとった人物が頻りに描かれたにもかかわらず、シノワズリーやジャポニズムは18世紀以降のことで、17世紀オランダ美術における「東洋表象」は断片的かつ周縁的事象と見なされてきた。本研究においては日本のオランダ美術研究者が中心となり、オランダの東洋美術研究者、日本美術の輸出工芸の研究者などさまざまな研究者たちとの交流の中で17世紀オランダ美術において東洋美術がどのように受容され、また、東洋的なものがどのように認識されていったのか、そして、それはオランダの人々の自己認識にどのような影響を与えたのかといったことを課題に想定しながら研究を開始した。

2. 研究の目的

17世紀オランダ美術における東洋表象の事例(画中モチーフ、史料における東洋への言及など)を数多く収集し、この課題の基礎資料を作成することを目的とした。ただし、対象があまりにも拡散するおそれがあったため、また、個々の作品の正確な情報が不明なものが多いことが予想されたため、データベースというよりは基礎資料の作成をめざした。また、当面の目標として、基礎資料を利用しながら、個別の研究論文を完成させることをめざした。17世紀オランダ美術の研究において「アジア」との関連は従来から指摘されてはきたが、それらは断片的であり、しかも、多くの場合、欧米ではもっぱら東洋学の研究者によってなされることがほとんどであり、この問題がオランダ美術の研究者によって取りあげられることはあまりなかった。オランダ美術研究者と日本の輸出工芸の研究者、さらには、欧米の東洋美術研究者などとの交流をはかり、この課題をより広範な分野の研究者に共有してもらうことも広い意味ではこの研究の目的のひとつであった。

3. 研究の方法

オランダ国立美術研究所から提供された写真資料を出発点として磁器を含む静物画の基礎資料の作成をおこなった。また、同時代にヨーロッパ各国で刊行されたアジア旅行記に関する基礎調査をおこなった。特に、マッテオ・リッチ「イエズス会によるキリスト教徒のチーナ布教について」、ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン『東方案内記』、フランソワ・ベルニエ『ムガル帝国誌』、エンゲルベルト・ケンペル『日本誌』を題材に、

アジアの歴史、文化、風習、また、特に、美術に関連する記述を抜き出し、注釈をつけた。これは今後の東西交流研究の基礎となるものであろう。また、平成29年1月21日に国立西洋美術館で国際シンポジウムを開催し、輸出工芸の専門家や海外(オランダ、ドイツ、中国)の研究者との交流をはかった。

4. 研究成果

日蘭関係の研究はこれまでもさまざまな立場からおこなわれてきたが、日蘭関係という言葉に象徴されるように、これは日本の歴史や日本美術の研究者が日本側の視点からおこなう研究であった。無論、それ自体に瑕疵があるわけではない。けれども、日蘭関係であるならば、オランダ側からの視点も欠かせないはずであり、しかも、日蘭関係を日本とオランダという二国間の問題として議論することは、実は不可能なのである。長崎は日本にとって唯一の対外的窓口だった。だから、日本に限定した対外的問題もあるには違いない。その範囲において日蘭関係は有効かもしれない。しかし、そこには絶えず、中国との交流があり、オランダにとっては日本よりむしろ中国のほうが重要だった。とすれば、日蘭関係は必然的に東アジアとオランダ、さらには、アジア全体とオランダとの関係に広がっていくだろう。日蘭関係もそのようなより大きな構想の中で探求されていくべきである。本研究はその端緒に過ぎないが、「17世紀オランダ美術における〈アジア〉」というテーマでなされた本研究は今後のこの分野の先駆的業績となるに違いない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Michiko Fukaya, Connection between Rough and Brushstrokes and Vulgar Subjects in Seventeenth-Century Netherlandish Paintings, *Kyoto Studies in Art History* (vol.2), 2017, pp.55-71 (査読なし)

〔学会発表〕(計4件)

幸福輝「画中のアジア 17世紀オランダ静物画に描かれた東洋磁器」
国際シンポジウム「17世紀オランダ美術と〈アジア〉」
2017年1月21日、国立西洋美術館(東京都・台東区)
青野純子「贅沢か虚無か 18世紀初頭のオランダ風俗画に描かれた磁器蒐集」
国際シンポジウム「17世紀オランダ美術と〈アジア〉」
2017年1月21日、国立西洋美術館(東京都・台東区)

深谷訓子「書画同源？オランダと漢字の出会い」
国際シンポジウム「17世紀オランダ美術と<アジア>」
2017年1月21日、国立西洋美術館（東京都・台東区）
尾崎彰宏「磁器の白い輝き もうひとつのオランダ美術史」
国際シンポジウム「17世紀オランダ美術と<アジア>」
2017年1月21日、国立西洋美術館（東京都・台東区）

〔図書〕(計2件)

幸福輝（監修）『17世紀オランダ美術の東洋表象研究』（2017年 国立西洋美術館）157頁

* 同書には以下の論文が含まれる。

幸福輝

「17世紀オランダ美術の内と外」 pp.9-19

幸福輝

「画中のアジア 17世紀オランダ静物画に描かれた東洋磁器」 pp.21-32

青野純子

「贅沢か虚無か 18世紀初頭のオランダ風俗画に描かれた磁器蒐集」 pp.33-41

高城靖之

「漆器のパラドックス 海を渡った漆器と17世紀オランダ静物画の中の漆器」 pp.43-49

中田明日佳

「ヤン・ヴァン・ケッセル（父）およびエムス・クウェリヌス作《アジア》（ミュンヘン、アルテピナコテーク）にみるアジア表象の特徴とアジアへのまなざし」 pp.51-58

深谷訓子

「書画同源？オランダと漢字の出会い」 pp.59-66

尾崎彰宏

「磁器の白い輝き もうひとつのオランダ美術史」 pp.67-72

幸福輝（監修）『17世紀オランダ美術と<アジア>』（2017年、国立西洋美術館）85頁

* 同書には以下の論文が含まれる。

幸福輝

「アジアを収集する、アジアを表象する」 pp.11-19

櫻庭美咲

「オラニエ＝ナッサウ家の磁器収集と陳列の諸相」 pp.20-26

青野純子

「贅沢か虚無か 18世紀初頭のオランダ風俗画に描かれた磁器蒐集」 pp.27-35

日高薫

「記憶と幻想 日本製輸出漆器にみる風景表現」 pp.36-41

シー・チンフェイ

「世界的文脈における17世紀後半から18世紀前半までのデルフト多彩陶器」 pp.42-46

アンナ・グラスカンプ

「反射の枠組み 1550年から1650年における‘インド’の貝殻表面とオランダの収集」 pp.47-55

深谷訓子

「書画同源？オランダと漢字の出会い」 pp.56-64

タイス・ウェストステイン

「フェルメールの描いた磁器」 pp.65-72

尾崎彰宏

「磁器の白い輝き もうひとつのオランダ美術史」 pp.73-79

尾崎彰宏（監修）『ネーデルラント美術の光輝』（2017年 ありな書房）241頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

幸福輝（KOFUKU, Akira）

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・客員研究員

研究者番号：00150045

(2) 研究分担者

尾崎 彰宏（OZAKI, Akihiro）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：80160844

(3) 連携研究者

青野 純子 (AONO, Junko)
九州大学・基幹教育院・准教授
研究者番号：20620462

(3)連携研究者

深谷 訓子 (FUKAYA, Michiko)
京都市立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：30433379

(3)連携研究者

中田 明日佳 (NAKADA, Asuka)
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学
芸課・研究員
研究者番号：10614878

(4)研究協力者

高城 靖之 (TAKASHIRO, Yasuyuki)